

特別寄稿

「文豪大谷崎の机」制作顛末

笹倉 徹

二〇〇六年七月二四日、芦屋の谷崎潤一郎記念館館長の松岡有宇子さんから電話があった。瀬戸内寂聴さんの文机を作ってほしい、という話だったので驚いた。

寂聴さんが講演で芦屋市に來られた際、松岡さんは記念館と神戸の谷崎の旧居・倚松庵へ寂聴さんを案内した。倚松庵を案内中、二階にあった両袖机に寂聴さんの目が留まり、私もこんな机が欲しい、と松岡さんに言われたらしい。すぐ松岡さんは、いい職人を紹介します、と応じられ注文を受けることになったというのだ。私にとつてはなんとも嬉しい話で、すぐに受諾のお返事をした。

七月二七日、谷崎研究の第一人者である武庫川女子大学のたつみ都志教授の案内で倚松庵を訪ねた。件の文机（両

袖机）は二階にあった。一見して天板の木目は櫟で、ロール削りの薄板を張ったベニヤ板だ。ロールで削りだした木目は一枚板にはない豊かな表情を示す。寂聴さんは一回り大きい文机のその木目に存在感を見られたのだと思う。一瞬頭の中は材料のことで戸惑いを感じた。もし寂聴さんがこの木目に感動されたのなら、寂聴さんが気に入るような文机を作るのは難しいぞ、ととにかく採寸をさせてもらって倚松庵を後にした。

次の日、お世話になっている柏原銘木店を訪ね、求めた櫟材の話をした。寸法を聞いた店主はすぐに一枚の櫟材に案内した。驚いた。寸法がピッタリでなおかつ素晴らしい木目の乾燥材がそこにあった。即決で買求めた。その板

一枚で天板と両サイドは間に合う。あとの材料は手持の材で充分選べる。

二〇〇六年は何かと忙しい年だった。本業の木工の他に夏休みには西脇市民ミュージカルに出演、秋には全国障害者スポーツ大会に幅跳び・立ち幅跳びで出場、春には副鼻腔炎の手術も受けた。九月には谷崎潤一郎記念館と東京と続けて個展があった。地元で二回の講演、神戸シルバーカレッジでも講義があった。兵庫県民芸協会の恒例イヴェント「くらしの工芸展」にも参加した。五十代後半は活躍すべき年回りなのだろう。忙しい割には苦勞もストレスもなく、寂聴さんの両袖机には嬉々として取り組んだ。年末に納める予定にして丁寧に仕事を進めた。九月の谷崎潤一郎記念館での個展では、松岡館長の提案で製作途中の机を仮組して出品した。白木の状態とはいえ、寂聴さんの文机として大いに反響を得た。十一月十三日、京都の室金物店に出掛けて、引き出しの把手金具を吟味する。この金物店は昔ながらの製法で特注にも応じてくれるが、丁度好い漆拭きの引手があったので仕入れる。

(日記)

一二・五 ようやく文机も引出しを加工、仕上げに近づ

き佳境に入った。

一二・六 いよいよ文机が完成である。満足のいく仕上がりである。瀬戸内寂聴さんに納められるか？彼女に会えるか？この仕事が今年のいそがしい日々の集大成となる。ターンニングポイントにもなりそうだ。

一二・七 寂聴文机完成。完璧とまではいかないがまずまずの出来。

二〇〇六年二月一日、満を持して京都嵐山嵯峨野の寂庵へ納品に出かけた。その日の日記である。

「登志子と寂庵へ両袖机を納品する。嵯峨野の北の突当たり、奥嵯峨の閑静な佇まいに寂庵は座している。莫山の「寂」字の石碑や、多くの石仏が鎮座する庭には、楓の遅い紅葉が美しい。寺男と称される岡野さんの知恵ある助言と助力により、重い両袖机を荒縄と天秤棒で難なく運び込む。所定の位置にすわると、寂庵の空気にしっくりと馴染んで、まるで前からそこにあったような自然な姿だった。嬉しかった。」

直前の十一月三日に寂聴さんは文化勲章の叙勲を受けられ、東京で忙しい日々を送っておられたため、残念ながらお会いできなかった。しかし、あくる日の一六日に「白道」のラベルの張られた数箱の清酒が届き、中に寂聴さん直筆の手紙が添えられていた。文化勲章受章後、想像に絶する騒ぎに巻き込まれ、暮れまで出版社の缶詰になっていたのと。納品への労いと、おもてなしできなかったお詫び。留守のものが素晴らしい机だと言っていて楽しみにしている。そのうち机のことを書きます。云々と便箋三枚に万年筆と思われる丁寧な筆跡で認めてあった。嵯峨野に納品したのは前日の午前で、お忙しい中、宅急便とはいえこんなに早く対応されることに驚いた。ましてやその内容は一職人にはもつたないようなお心遣いだ。あの著名な文筆家からの手紙は大切にしている。因みに送っていただいた数箱の清酒「白道」は、山形の男山酒蔵で寂聴さん自身がブレンドされた大吟醸酒で、箱・ボトルのデザインも寂聴さんが手がけた思いのこもったものだ。ラベルの文字「白道」は友人の莫山さん作で、言うまでもなく寂聴さんの著作題名の一つである。早速いただくと美味しいお酒で、少しずつ楽しみながら飲み干してしまった。今考えれば飲まずに

そのまま大事に保存しておけば貴重なヴィンテージものになっただろう。もつとも大吟醸酒を味わうのは早い方がいいと思うが。

その年の大晦日、寂聴さんは紅白歌合戦の審査員になられ、京都へ帰られたのは二〇〇七年の元旦である。一月一七日付で松岡館長に便箋五枚にわたって手紙を書いておられる。その中に例の文机のことにも触れておられる。

「さて 暮にお世話になりました机の件ですが、まあその立派なこと！本物よりはるかに堂々として存在感がすばらしく、細工の見事に驚嘆致しました 早速正月元旦二日 机の上で原稿を書いてみました まるで魔法のようにペンが走ります 谷崎さんが乗り憑ってくれたような不思議な感じがしました テレビにも撮ってもらいました 二月末のテレビに映る予定なので その節にはご報告いたします 机の報告もお世話になった御礼もすべてこんなに遅れましたこと深くおわび申し上げます 笹倉様にはまだ机を見ない段階でお礼は出てあります これから毎日新聞に机のことを書きますので それはお送りいたしますのでご

覧ください」

テレビ？新聞？単なる文机のことではないどんなことが放映されるのか？どんな記事が書けるのか？俄かに信じられなかった。当時寂聴さんが執筆されていたのは世阿弥の人生を綴った「秘花」だと思うが、正月にあの文机の上でその原稿に向かわれたのだろうか？松岡さんへの手紙を拝見してワクワクしてきたのを覚えている。あとでわかったことだが、二〇〇六年の当初からNHKは一年間寂聴さんをドキュメント取材で撮影を続けた。偶然その年の秋に文化勲章を受けることになったのである。そんな年に文机を作らせてもらったのも嬉しいご縁だ。

二〇〇七年一月一八日に寂聴さん直々から電話をいただいた。「貴男のことを新聞に書くわよ」というお声にまだ信じられない思いだった。一月二一日 毎日新聞「時代の風」で「文豪大谷崎の机」という記事が載った。有力新聞の第二面のトップ記事である。そこに寂聴さんが私の名前を書いて「文豪大谷崎の机」の作者として紹介されている。なんとというサービス精神だろう。嬉しい気持ちと同時に寂聴さんへの感謝の気持ちが湧いた。町内の友人が朝早々に

知らせてくれた。彼女の息子が毎日新聞に勤めており、当日の朝刊を一〇部ほど届けてくれた。新聞記事の反響は思ったより大きい。町長が朝礼で職員たちに「多可町にはすごい人がおつてや」と、新聞記事のことを披露したことをあとから聞いた。数人の遠方の知人からも電話があった。有難い気持ちいっぱい、翌日寂聴さんにお礼の手紙を出した。

「時代の風」は倚松庵で谷崎の机に出会ってから、出来上った机で執筆するまでのことが、劇的な素晴らしい文で綴つてある。後半の部分である。

十二月も押し迫つたある日、机の作者の笹倉徹さんご夫妻が机を寂庵に運んでくださった。生憎私は旅先で、その日は留守だった。

作者の笹倉徹氏は、大学を出てからこの道に入った木工芸の有名な作家であった。今やほとんど円熟自在の境に達していると評価され、熱烈なファンを持つているそうだ。

この人ならきつと、谷崎机と同じ存在感のある机を作ってくれるに違いないと、松岡館長が目をつけて頼

んでくださったのだという。笹倉さんの自筆の説明書には

「材は本体、抽斗前板が櫨、抽出の中板が桐材（広島）引手金具は京都の室金物店のもの、塗装は漆で、下地は中国産、仕上げは京都夜久野の漆。拭きとっては塗りをくり返す拭漆技法でしあげた」とある。

「倚松庵にあります両袖机を拝見した時、その存在感の確かさが寂聴先生の心を捉えたのだと直観しました。

そしてその存在感の源である天板の広さと柰目が果たしてすぐ見つかるかが、この仕事の決め手になりました。ありがたいことに寸法的にも柰目もイメージに近い板がすぐ見つかりいい出会いを得ました。

こんな時、縁のありがたさを実感します」

と、製作者の深い想い入れを打ちあけてくれてあった。私はこの机の上に新しい原稿用紙を広げて、年の始めの仕事をした。不思議なことに、写しにすぎない机なのに、谷崎さんの力が乗り移ったような昂揚感が、軀の芯からつきあげて来て、信じられないほどペンが

走り出すのであった。

「わあ！すごい！」

私はとうとう、机の上にべたと頬をつけて、両手で机を撫で廻していた。重くて、男手三人でも運び辛かったという机は、もう何十年も前から、そこに居坐っていたようにどっしりと構えている。

明けて数え八十六歳になった私が、あと何年この机でいくつ作品を産み出すことが出来るだろうか。谷崎さんは八十歳前に亡くなっている。

と結んでおられるが、この時から十何年も作家としての活動が続けられることになる。

NHKテレビで瀬戸内寂聴の一年がドキュメントで放映されたのは二〇〇七年二月だっただろうか。寂聴さんの寂庵での暮らしに加えて、文化勲章受章の様子も撮影された。終盤、紅白歌合戦の審査員を終えて京都へ帰った寂聴さんが、「新しい机はどこ？」といって真つ先に書斎の机に向かい、「わあ凄い！」と言って机に頬ずりされる様子が映っていて胸が詰まった。常々木工品の魅力の一つは愛撫する

ことによって美が磨かれることを、愛撫心といって敷衍している私は、以降この寂聴さんの行動を愛撫心になぞらえて話をしている。

「寂聴さんを祝う会」の招待状が届き、畏れ多いと思いながら出席の返事をした。文化勲章受章を祝う会は東京に次いで二回目である。関西では二〇〇七年三月一日、息

子が勤務する京都グランビアホテル最大の「源氏の間」で催された。五〇〇人ほどの招待席の中で、松岡館長と私は

最前列の中央に近い席だったのには驚いた。平野啓一郎さんのスピーチに始まり、京都ならではの華々しいプログラムが次々と寂聴さんを祝った。途中寂聴さんがみなさんのテーブルにあいさつ回りをされ、私のテーブルにも来られた。机の作者として紹介されると「まあ、若いのねえ！もっと年配の方だと思っていた」と可愛い声でおっしゃった。

「もうすぐ還暦です」と応じると「六〇才なんてまだまだ若いわよ」と笑いながら叱るように言ってくださった。寂聴さん八四歳わたし五九歳の一瞬の交流は、私にとって宝物の様な大切な思い出である。

文机に再会する機会が、大々的に開催された「文化勲章

受章 作家生活50周年記念 瀬戸内寂聴展」によってもたらされた。会場に設営された書斎の中央にデンと据わっていた。各地の寂聴展で披露され、密かに誇らしく思っていた。寂聴さんが亡くなられて主を失った机はどうなるのか案じていたが、今は徳島県立文学書道館の瀬戸内寂聴記念室に納まっているという。近いうちに会いに行きたい、という気持ちが募ってきている。

2024・8・24

(参照)

『老春も愉し 続・晴美と寂聴のすべて』集英社

「文豪大谷崎の机」二八〇頁 所収